

平成29年度 嵐山町教職員研修会
「コミュニケーション力アップの日本語」

日本語検定委員会の審議委員を務めるフリーアナウンサーの梶原しげるさんが、8月22日に埼玉県嵐山町の嵐山町教職員研修会に招かれ、「コミュニケーション力アップの日本語」と題して講演を行った。



梶原しげる氏

1959年神奈川県茅ヶ崎市出身。早稲田大学法学部卒業後、文化放送にアナウンサーとして入社。その後、フリーとなり、バラエティーから報道まで番組出演は多岐にわたる。49歳で、東京成徳大学大学院心理学研究科に進学し、心理学修士号を取得。著書『口のきき方』（新潮新書刊）は15万部突破。現在は、東京成徳大学応用経営学部客員教授、日本語検定審議委員、日本語大賞審査委員など、多方面で精力的に活躍中。

子供が言葉に関心を 持った瞬間を逃すな!

梶原氏が講演前に始めたのは、「じゃんけん勝負」と「Ice Break Time!!」。一見、楽しいゲームのようだが、言葉を交わしにくい、会話ができない、輪に入れない、そんな初対面同志の距離を縮める有効な手段だ。受講者が一体となり、熱を帯びた幕開けとなった。



「何でもいいから話さない、仲良くしないで、と言われてできる人は、世の中にはほぼいません。必然性があるから人は口を開く。円滑なコミュニケーションには、必然性も大事なのです。子供が話をしないと思えば、話したくなる方法を工夫すればいいと思いますよ。何気ない会話でも、子供の言葉に対する興味を広げることができます。たとえば、野球の話題で、「ピッチャーが球を打ち取る」という言葉が出たとき、ピッチャーは球を投げるポジションだと認識している

子供には、「ピッチャー」と「打つ」が並ぶ会話に疑問を持つ。そこで、先生は「打つ」と「打ち取る」は音の響きが似ているだけで、意味が異なることを説明すると、子供は「打つ」と「打ち取る」の違いを理解します。それが言葉へ関心を持つきっかけになる。日々、何を話せば子供たちが関心を持つかという意識で、テレビやネットを見る、街を歩く、そうして情報をストックしておく。先生は、教育者である前に子供を相手にした商売人なのです」

共感を呼ぶのは 自慢話よりしくじり話

大人だってそうですが、子供を相手にするには、得体のしれない奴だと思わせるより、意外とわかりやすい奴だ、と思わせた方が好感度は高まる。幼稚園児、小学生、中学生にとれば、大人というだけで得体のしれないネガティブな存在なのだ。

「子供は、大人だからいい人だ、なんて思いませんよ。悪いこと言われそうだなと警戒はします。不安な気持ちの子供を前に、先生が“自分の殻をしっかりと舐められないようにしましょう!”、という態勢で臨めば、かえって逆効果です。それよりも、彼らと同じ目線に立ち、上手に自分の小・中学生時代の話をすることが賢明。大事なものは、自慢話よりもしくじり話。先生になった今につながるしくじり話をいくつか用意しておく。できれば20～30用意しておくといいですね」

会話を楽しもうとする工夫はとても大事。だが、最近では楽しむどころか、日本人同士なのになぜか会話が通じない。

「言葉にのせて何を表現するか、その力が日本語の力でもあるわけです。言葉の力ですね。ところが、年々日本語力が細っていて、会話が成立しないなんてことが多々あります。上司が部下を行きつけの小料理屋に連れて行く。その店のウリは新鮮な刺身。食べ終わって店を後にし、上司が部下に尋ねる。

上司：俺が良く来る店なんだけど、どうだった？

部下：やばいっすね！ほとんど、やばいっす

この上司、あまり若者との交流がない。

上司：やばかったか。そうか。いつもは新鮮なんだけどね。何が一番やばかった？

部下：赤貝がやばかったっすね！

上司：赤貝な。暑い時期はちょっとやばいんだよな…

これ、日本語がうまく通じてないってことですよ。ところが、こういう場面が結構多いんですよ。だからこそ、日本語力チェックのためにも日本語検定を受けてほしい！」

正しい日本語は 日本語検定で学ぶべし

日本語検定審議員でもある梶原さんが、気になる読めないキラキラネームや相撲の四股名について解説。キラキラネームに直面している受講者は熱心に聞き入っていた。さらに、日本語の中で梶原さんが最も危機感を持つのが、慣用句の使い方だと警鐘を促す。

「今現在柱となる50代の先生方が10年経って定年されると、大変なことが起きる可能性があるんですね。それは、慣用句についての認識。40代より上と下でまるで違って、若い世代は同じ日本語だとは思えないような理解をしています。



『上や下への大騒ぎ』。この言葉、間違ってますでしょうか。これは『上を下への大騒ぎ』が正解。上を下にして、下を上にしちゃうような、大騒ぎの様を表しています。上

と下で、同時に大騒ぎしているわけじゃないんです。ところが、今や6割の人が『上や下への大騒ぎ』を正解だと言っている。もちろん、日本語検定では『上を下への大騒ぎ』が正解ですよ。

続いて、『目覚めが悪い』。これもよく考えれば、『寝覚めが悪い』が本来の慣用句。“寝覚めが悪いんだよな。あんなことしちゃってさ。あんなこと言わなきゃよかった”。なんとなく悔いが残る様。でも、世代がどんどん

進んでいくと、ひょっとしたら辞書も日本語検定も『目覚めが悪い』が正解になる可能性が無いとは言えません。言葉というのは、何が正しくて何が間違いか、というよりむしろ、どの語釈が最も多くの人に理解されているかが基準になります。従って、辞書だって語釈が変わっています。日本語検定も、時代に合わせて変わっていきますが、今現在 2017 年 8 月時点においては『寝覚めが悪い』です。

『役不足』を謙遜として使うという人がいますね。“このたび、本社の局次長を拝命致しました梶原でございます。はなはだ役不足ではございますが、皆さんと共に頑張っ参ります”。結構使いますよね。ですが、『役不足』というのは謙遜ではなく、不満。与えられた役では、自分は満足していないということ。仕事の成功で、部長から局次長に昇進したにも関わらず、内心は不満。“何で局次長なんだ。俺が狙ってたのは局長なんだよ!まったく、今回の人事は役不足だ”。これが正しい使い方です。役不足ではございますが…、なんて言ったら、せっかく登用してくれた人に対して失礼ですよ。不足だと不満を述べているわけですから。

『枯れ木も山の賑わい』。本来はけなし言葉ですが、文化庁が毎年行っている国語業務調査によれば、全体の 7 割以上が誉め言葉だと答えています。ビックリです!世代にもよりますけれどもね。これじゃあ日本語が通じないでしょ。『枯れ木も山の賑わい』で褒めたり、けなしたりするんだから。

一方で、『流れに棹さす』は本来じゃない使われ方が圧倒的。“梶原君、さっきから君の話聞いてると、我々の議論の流れに棹さしてるよな”。話を止めていると文句に聞こえますが、本来は褒め言葉。“梶原君は、議論を前に進めてスピードを上げようと努力してる。素晴らしい!” ってことなんです。そう理解する人は世の中からは消え去っているかもしれません。『流れに棹さす』は流れに勢いを増す行為。舟を見れば、船頭さんは流れに棹をさして舟を進めてるのが解るのですが、この理解も過去 3 回の調査で過半数以上がネガティブでした」

世代間の対話が難しい時代 だからこそ日本語を磨け

緩急織り交ぜたテンポの良い語り口のにせ、興味深い話題に受講者も真剣。最後に、コミュニケーションの要ともいえる傾聴訓練が実践された。聞き手はしっかり深く相手の話を聞く。聞いて、頷く、質問する、感動する、身振りも手ぶりも添えながら体中で聞き取る。

「自分の話をしっかり聞いてもらえたことに、人は満足感を得ます。皆さん忙しすぎて、生徒や保護者の話なんてなかなか聞けないと思いますが、2 分間だけ、1 分間でもいい、しっかり相手の言っていることを聞いてあげる。相手の言葉に反論するのではなく、とりあえず受け止めてみる。日本語は、コミュニケーションにおいて、非常に重要な鍵を握っています。にもかかわらず、現在はコミュニケーションを取るのが非常に厄介な時代。そういう中でもがき苦しみ、絶えず人を相手にしている皆さんは、さらに、日本語の技を高めていただきたい。そのためには日本語検定ですね。そして、梶原しげるさんの本もたまには読んでみる(笑)」

